

# 松の緑

## 千葉 寛

一月十二日、宮中の新春行事「歌会始の儀」が行われた。今年のお題は「緑」で、一般の詠進歌から選ばれた入選歌十首も披露され、さまざま「緑」が作者の生活から生み出されている。

その「緑」についてだが、ドイツの心理学者W・ヘルパは面白い実験を行った。彼は自然界を構成する色彩と人間の心の相関関係を実験的に（呼吸や脈拍の変化）証明しようとしたのである。そして「緑」は心を平静にする色であることを証明した。赤や黄は興奮させるが、青とか「緑」は人の心を穏やかにする作用を示すというわけである。このような実験からも「緑」は平和や安全の象徴ともなるわけだろうが、現在、都会での私たちの生活がぎすぎすとした雰囲気包まれているのも、ひょっとして「緑」が極端に少ないせいかもしれない。

しかし、日本はもともと「緑」の風土に恵まれていた。「緑」は私達の生活の基本となる色彩で、今でも精神生活と深く結びついている。古来、歌語として「緑児」「緑なる」「緑の糸」「竹の緑」「松の緑」等の表現がみられ、その多くは大自然の新鮮な草木の色を表わしている。これは和歌などの韻文に限らず、散文にも大自然の「緑」の表現がみられる。

七月の青峰まぢかく燂鉢炉 山口誓子  
万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

などは私の好きな俳句で、「緑」が非常に印象的である。

ところで「松の緑」の表現だが、鎌倉中期の白拍子、実材母に次のような歌がある。いくちよもかはらぬまつのみとりさへなを色まさる春はきにけり

西園寺公経の妾で白拍子の出身である作者は上下二巻、八八七首収められている家集が残っている（宮内庁書陵部蔵の孤本）。

その上巻末にみえる百首歌の形態をとった一連の歌（部立や題の銘記はないが、春夏秋冬の四季と恋・雑の部で構成されている）の冒頭に見える歌である。作者は春の到来を「松の緑」に発見する。常緑の松の緑もその瑞々しさが増すと、春の訪れの喜びを詠んでいる。この百首歌の冒頭に「松の緑」を持ってきているわけだが、一時代前の歌人、二条院讃岐の歌に  
春霞分行まゝに尾上なる松の緑ぞ色まさりける

という歌がある。春は既に到来して霞の中の「松の緑」が詠まれている。人々は自然の微かな胎動に春の到来を知ろうとした。それは「霞」であり「解氷」であるの

が伝統的な美意識であった。讃岐の歌はその点でいうなら伝統にのっとった歌である。実材母が春の部、いや百首歌の冒頭に「松の緑」を持ってきているのは従来とは違う新鮮な感じを受ける。

もちろん実材母とて全く伝統を無視してゐるわけではなく、右の歌に続いてやはり「霞」「鶯」という初春の景物を詠んで、さらに時の推移に順って歌が詠まれ、配列がなされており、春の部は暮春の歌で終えるのである。このような伝統的配列意識は他の季節の歌にも見え、作者は時の推移を明らかに念頭に置いて詠じ、配列している。その中でも

むかしおもふ老のねさめのあけかたにあはれつくせとしかもなくなり  
めつらしと見るはつゆきもいたつらにわか身ふりてやとつともるらむ  
等は作者の境涯を感じさせ

さしてそのことそともなきなかめにもあはれはしるき春のあけほの  
しくれつるそらにたよふうき雲のかたえはれゆく秋のゆふかせ  
おもふ事かきなすへきかたそなきすゝ

りの水もかつこほりつゝ  
と作者の澄んだ目には中世的な美も感じられる。

恋の部にも時の推移の意識は窺われる。

こひといふ名もしらさりにしへのおなし身さへそらうやましける  
たちそひてむすはくれけるけふりさへはてはむなしきそらのうき雲

恋の最初と最後に置かれた歌である。そしてここにはあたかも一つの恋物語を構築しようとする作者の意図が感じられる。恋を知った故に嘆き悲しみ、恋人の来訪を頼み、ためらいながらも思いが日増しにつのり、思い乱れ、そして契りのはかなさを知り、恋のはかなさを知る。初恋から終恋と一人の女性の恋物語がそこにみられる。雑の部は懐旧の歌が多い。

いにしへをおもひいつれはさらしなや月になくさむわか心かな  
むかしおもふおひのねさめにつくくと  
なをよをのこすかねのをと哉

年老いて心慰むものは月だけであり、追慕の念に堪えない日々を送っている作者の姿が浮かんでくる。その雑の部の冒頭の歌

は

ふしのねにたえずかゝれるしら雪はけに  
時しらぬゆきかとそみる

であって、「けに時しらぬ」と恒常のものを置き、前の懐旧の二首に代表される雑の歌と相まって、やはりここにも時の推移を感じさせる構成となっている。また

いつまでかよそにおもはんとりへやまも  
ゆるけふりにまかふうき雲

の歌から、単に現実の哀感を表現したのではなく無常感へ通じるものと考えられる歌もあるが、それにしても作者の歌は感傷的である。ともかく時の推移、時の流れを意識しながら、その中で刻々と変化していく無常的な世界、生生流転の世界を構築しようとする意図が雑の部に感じられ、さらにこの百首歌全体からも感じとられる。そして雑の末尾、つまりこの百首歌の最後はとかへりのはなさくまつのみとりをは君かやちよのためしとそ見る

という賀の歌だが、ここにも「松の緑」がある。冒頭と末尾の「松の緑」。どちらも私にはこの百首歌のアンチテーゼのような気がしてならない。